

地球の健康、社会の健康、人間の健康



北海道大学 総長

ほうきん きよひろ
寶金 清博

【略歴】

昭和29年北海道生まれ。昭和54年北海道大学医学部卒業、医学博士、脳神経外科専門医。

アメリカ合衆国カリフォルニア大学デービス校客員研究員、アメリカ合衆国スタンフォード大学・英国王立神経研究所文部省在外研究員、札幌医科大学医学部教授、北海道大学大学院医学研究科教授、北海道大学病院院長を経て、令和2年10月より現職。臨床では、脳血管再建術、もやもや病の外科治療、研究では、骨髄幹細胞を用いた再生医療を専門とする。また、日本学術会議会員として、認知症に関する提言を行っている。

コロナ禍は、世界、地域社会、個人を巻き込む広範な領域で、極めて短期間に劇的な変化を私たちに引き起こしました。現在も、これがどのように収束するかという予測は困難であり、ポストコロナ社会のあり方は不透明です。言うまでもなく、この間、医療・医学についても、コロナ禍によって表出してきた明確な課題がいくつもあります。

例えば、コロナ禍というパンデミックの中で、医療・医学と社会の関係が改めて問われました。また、医療・医学もDX化が急速に進み、大きな転換点にきたことなどが挙げられます。

また、医学に限らないことですが、社会活動が、集中から分散に方向転換し、ICTの進歩やDXの進展により、地域での医療・医学もそうした大きな変化の影響を受けています。

さらに、日本における地域創生や世界の大きなベクトルであるSDGs、ゼロカーボン、多様性に満ちた社会、包摂的社会などの動きは、コロナ禍でも減速することなく、むしろ加速し、大きな潮流となっています。これらは、医療・医学に対しても大きな影響を与えるものです。

そこで、今回は、「地球の健康、社会の健康、人間の健康」というテーマで講演させていただきます。これは、コロナ禍の教訓を経て、次の時代に向かう、医療・医学と社会の関係を世界、地域社会、個人のレベルで再定義することでもあります。

考えるレベルを以下の3つのレベルとしてみました。

- ① 世界のレベル(地球の健康)
- ② 地域社会のレベル(社会の健康)、
- ③ 個人のレベル(人間の健康)、

これらの3つの観点から、皆さんと医療の未来を考えてみたいと思います。私達医療者は、これまで、③の観点から「健康」を診てきました。それは今後も変わらない最も重要な観点です。しかし、これに加えて、今後は、①と②が必須のものになると思います。

その基盤には、ESG（環境、社会、ガバナンス）の立場から、世界の共通の価値観であり目標であるSDGsとゼロカーボンを目指すアカデミアの一員としての医療・医学の責任があります。こうしたポストコロナの社会構築、持続可能な世界に向けて、私達医療従事者のできること、そして、なすべきことを考える機会としたいと思います。